円通寺跡・深谷やぐら群について

令和６年(2024年)　１月１２日
第４回文化財専門審議会
資料２

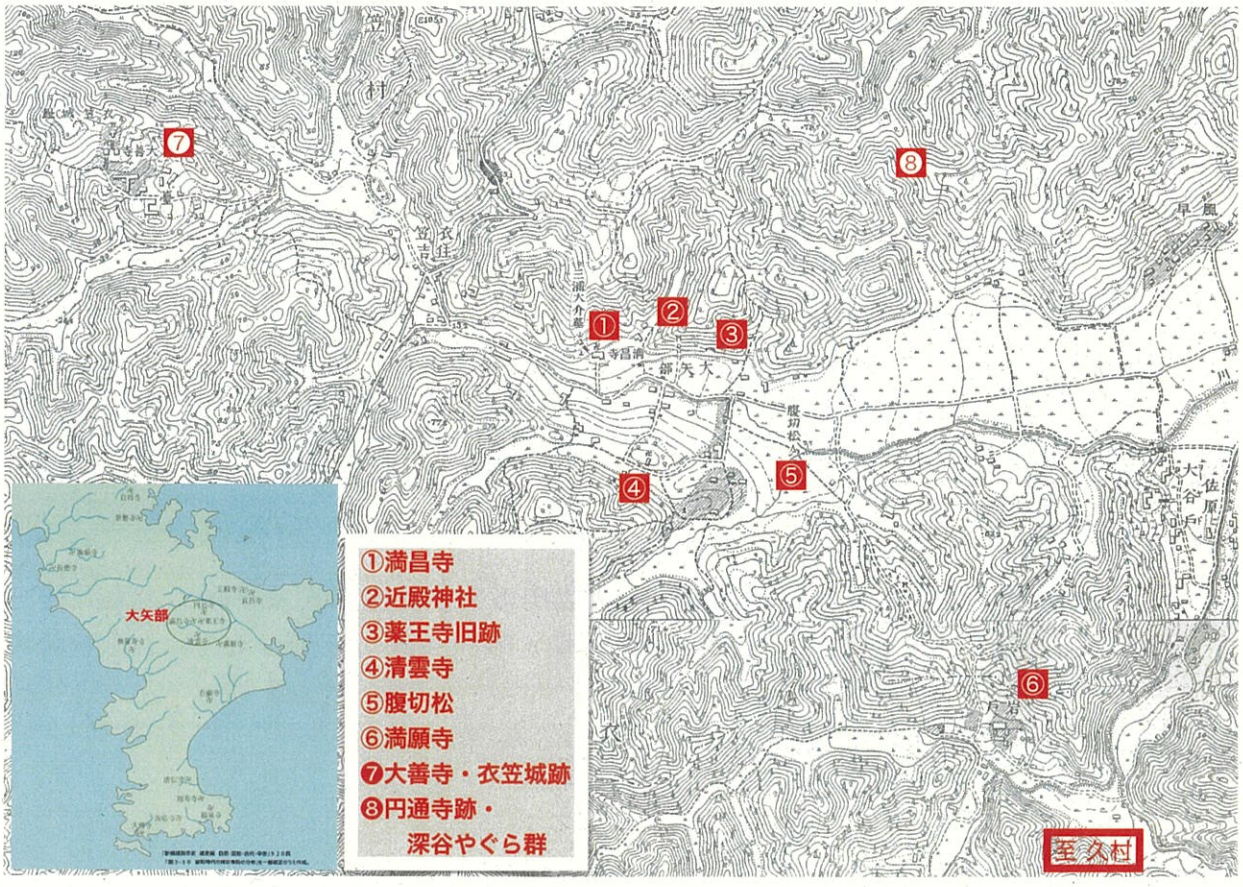
三浦一族について

三浦一族は平安時代後期から源義家や義朝と行動を共にしつつ三浦半島を中心に相模国に勢力を拡大した。1180年の頼朝挙兵に呼応し、当主義明が犠牲になりながらも鎌倉幕府創設に大きく貢献、幕府内で重要な地位を占め全盛期を迎える。1247年の宝治合戦で宗家が滅ぼされた後は庶流の佐原氏が「三浦介」を継承する。三浦氏は戦国時代の1516年に三浦市油壺の新井城で北条早雲に滅ぼされたものの、それまでに美作三浦氏や奥州芦名氏などが派生し、武家の名門として後世にまでその名を轟かせた。

横須賀市の大矢部地域一帯は、平安時代末から鎌倉時代にかけての三浦一族の本拠地であり、三浦一族ゆかりの寺院や文化財が数多く残されている。

三浦一族略系図

- 桓武天皇 ― 葛原親王 ― 高見王 ― 高望王 ― 良文 ― 忠通
  - 為通
    - 為継
      - 為俊
    - 義継
      - 義明
        - 義宗
          - 義盛
            - 常盛
            - 泰村
              - 光村
              - 家村
            - 義村
            - 重澄
            - 胤義
            - 友澄
          - 義澄
          - 義久
          - 義春
          - 義季
          - 義連
            - 盛連
              - 光盛
              - 盛時
              - 時連
        - 義行
        - 為清
        - 義実



① 満昌寺（まんしょうじ）

義明山と号し、臨済宗建長寺派。『吾妻鏡』建久５年（1194）９月２９日条によれば、源頼朝は三浦義明の没後を弔うため、三浦矢部郷内に一堂建立を企てており、のち創建されたのが満昌寺と伝えている。中興開山は天岸慧広（建武2年・1335歿）で、この時、臨済宗に改められ現在に至る。

木造（もくぞう） 宝冠釈迦如来坐像（ほうかんしゃかにょらいざぞう） （市指定重要文化財）

檜材。割矧（わりは）ぎ造、玉眼入、漆箔。像高36.6ｃｍ。当寺の本尊。如来であるが菩薩と同様に、頭髪を結い上げ、宝冠を頂く。この種の像は「宝冠の釈迦」または「華厳の釈迦」と言われる。像底に文安元年（1444）の修理名があり、三浦大介義明の「百六迄守本尊」と記されている。南北朝時代作。

木造（もくぞう） 天岸慧広坐像（てんがんえこうざぞう） （市指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高74.0ｃｍ。禅僧天岸慧広（1262～1335）は、元応２年（1320）に中国に渡り、のち建武元年（1334）、上杉重兼が鎌倉報国寺を創建した際、開山に招かれた。翌年６３歳で示寂。諡号を仏乗禅師という。像は頂相（ちんそう）と言われる通常の禅僧肖像で、個性的な面貌の写実に優れた彫像で、歿後間もなくの制作になるものであろう。南北朝時代作。

木造（もくぞう） 三浦義明坐像（みうらよしあきざぞう） （国指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高81.4ｃｍ。三浦義明は氏祖の為通より四代。治承4年（1180）の源頼朝挙兵の際、衣笠合戦で戦死、89歳であった。死後、御霊神明社に祀られる。像はいわゆる武人俗体肖像として、衣冠束帯の姿形にあらわされる。面部の描写はかなり個性的で、像容も整い、等身大の貴重な彫像である。鎌倉時代後期作。

石造（せきぞう） 双式板碑（そうしきいたび） （市指定重要文化財）

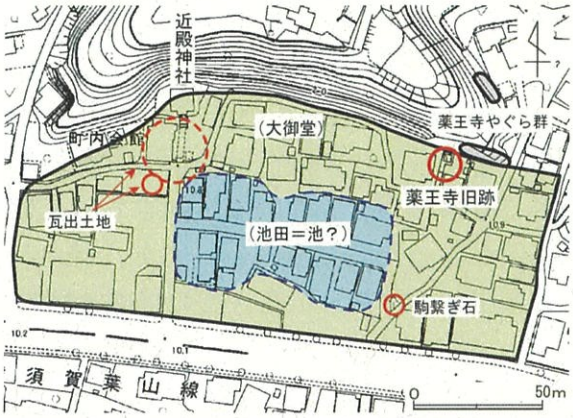
2基一対、元応２年（1320）在銘。緑泥片岩製。１基は阿弥陀三尊種子板碑を主尊とし、下方にいずれも光明真言（梵字）と元応２年の年紀銘を刻んでいる。市内で完全な形の板碑としては最古のものである。

伝（でん） 三浦義明廟所（みうらよしあきびょうしょ） （市指定史跡）

瓦塀に囲まれた墓域内に、安山岩製の宝篋印塔（伝義明墓）及び凝灰岩製五輪塔（伝妻墓）が安置される。また緑泥片岩製板碑（151ｃｍ）があり、いずれも鎌倉時代末期から南北朝時代の作である。

② 近殿神社（ちかたじんじゃ）

祭神は三浦義村。大矢部氏子の祖神。大正２年衣笠神社に合併。村民にとっては不便で、昭和23年２月復旧。社屋は昭和51年改築されたもの。境内では鎌倉時代前期から室町時代にかけての瓦が採集されている。



薬王寺遺跡全体図

③ 薬王寺旧跡（やくおうじきゅうせき）（市指定史跡）

薬王寺について『新編相模国風土記稿』は「本尊は薬師なり、建暦二年（1380）和田左衛門尉義盛、父杉本太郎義宗・叔父三浦介義澄菩提の為に創建する所なり」と記している。義澄の墓と言われる前面住宅地一帯が、廃寺となった薬王寺跡。北側山裾には薬王寺やぐら群があり、鎌倉時代末から室町時代の瓦が採集されている。

昭和38年空中写真

④ 清雲寺（せいうんじ）

大富山と号し、臨済宗円覚寺派。開基は三浦氏二代の為継（天仁元年・1108歿）と伝える。中興開山大雅省音（応永24年・1417歿）の時、天台宗を改め臨済宗とし、現在に至る。現在は台地上にあるが江戸時代中頃までは北側の低地にあった。

木造（もくぞう） 観音菩薩坐像（かんのんぼさつざぞう）　（国指定重要文化財）

桜桃材。寄木造、玉眼（ガラス玉）入、彩色。像高61.8ｃｍ。通称　滝見観音。もとは円通寺本尊であったと伝わる。本像は日本の仏像彫刻にない特異な形姿と技法で製作されており、京都の泉涌寺の楊貴妃観音と同様の特徴を備えている。中

国・南宋からの請来像と考えられ、鎌倉時代の東国への宋文化の移入と受容の具体例として極めて貴重である。

本像の三浦の地への伝来の要因として、楊貴妃観音のある泉涌寺の僧・俊芿の関わりが考えられる。俊芿は宋に渡り帰国した後に泉涌寺を中興した人物で、宋文化の将来者でもあった。三浦一族の招きで大矢部を訪れた記録があるなど、三浦一族とは密接な関係があったと見られる。また、鎌倉時代前期に全盛期を迎えていた三浦一族は九州にも進出しており、宋商人との接触や貿易による可能性も考えられる。

木造（もくぞう） 毘沙門天（びしゃもんてん） 立像（りゅうぞう）（県指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高71.7ｃｍ。俗に「矢請けの毘沙門」と言われる。法量は大きくないが、写実に優れ、均整のとれた体軀に、軽快な動勢を巧みに彫出する。鎌倉時代中期作。

地蔵菩薩坐像（じぞうぼさつざぞう）（市指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高22.0ｃｍ。　両袖や裳裾を垂下させる宋風の特色を示し、流れるような衣文の彫出など、小像ながら典型的な南北朝時代の作風をみせる佳例である。

伝（でん） 三浦為継（みうらためつぐ）とその一党（いっとう）の廟所（びょうしょ）（市指定史跡）

当寺の開基である三浦為継の墓塔である五輪塔に、昭和１４年に深谷やぐら群から移された三浦為通・義継の二基の五輪塔を併せ安置したもの。周囲の石塔類も同時に移したものである。

石造（せきぞう） 板碑文永八年在銘（いたびぶんえいはちねんざいめい）（市指定重要文化財）

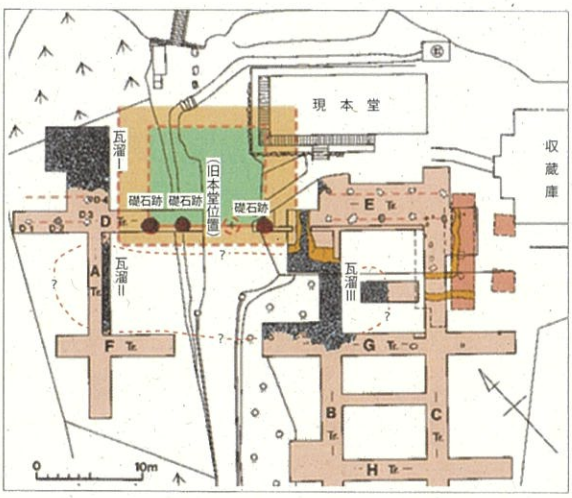
現高140.0cm、巾44.0cm緑泥片岩製。もとは深谷やぐら群内の1号やぐら前庭部にあった。文永八年（１２７１年）に佐原盛信が父である光盛の十三回忌に建立したことが刻まれている。盛信は翌年に起こった北条氏の内紛である「二月騒動」に巻き込まれ自害している。やぐら群造営に関わったと見られる個人とその年代が特定される貴重な例である。

⑤　腹切松（はらきりまつ）

上総へ逃れる頼朝を助けるよう義澄等一族を送り出したあとの大介義明の生死について色々語り伝えられるものの一つに、義明は城を抜け出しこの辺りまで来ると、円通寺（開基三浦為通）の方角に向いて自害したと言われている。

⑥　満願寺（まんがんじ）

岩戸山と号し、臨済宗建長寺派。三浦義明の子佐原義連が平家追討のため西海に赴く際、一堂を建立。のち子家連等によって貞応３年（1224）までに、伽藍が整備されたものと推測される。中興開山は明岩正因（応安２年・1369寂）で、この時、臨済宗となる。境内では鎌倉時代初期から前期の瓦が大量に出土しており、総瓦葺の堂宇が存在したことが確実視されている。



満願寺遺構配置図

木造（もくぞう） 菩薩立像（ぼさつりゅうぞう）（国指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、古色漆塗。像高224.7ｃｍ。観音菩薩と伝わる。佐原義連19歳の肖像との伝えがある。張りのある面貌、圧倒的な量感やたくましさは、運慶風を踏襲したもので、その形制や姿態は市内浄楽寺阿弥陀三尊像の脇侍菩薩像に極めて近い。鎌倉時代前期作。

木造 地蔵菩薩 立像（国指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、古色漆塗。像高203.7ｃｍ。圧倒するような量感を備え、堂々と直立する姿は迫力に富んでいる。面貌も厳しく張りがあり、総体に運慶風の作風を顕著に示している。観音像と同時作。

木造 不動 明王 立像（市指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高163.2ｃｍ。やや身のこなしは硬いが、量感に富み、忿怒の相好など総体に勁い趣がある。まだ世俗的な影響がないところから、鎌倉時代中期まで遡る作であろう。

木造 毘沙門天 立像（市指定重要文化財）

檜材。寄木造、玉眼入、彩色。像高164.5ｃｍ。一見、誇張気味の忿怒相であるが、がっしりとした太づくりの体貌は、伝統的な運慶風（慶派風）の力強さを基調としており、不動明王像と同時の作と思われる。鎌倉時代中期頃の制作になるものであろう。

⑦衣笠城跡（きぬがさじょうあと）（市指定史跡）・大善寺（だいぜんじ）

前九年合戦に源頼義に従い参加した村岡為通が恩賞として三浦の地を与えられ、その土地の名を自らの姓としたのが三浦氏の始まりとされる。その際に衣笠城を本拠地として築いたと伝わる。史跡地内からは平安時代の経筒、合子、水滴が出土している。

木造 毘沙門天 立像（市指定重要文化財）

像高92.0cm、髪際高79.3cm、ヒノキ寄木造り。奥州合戦後、鎌倉文化圏において平泉仏教文化の影響を受けた仏像は確認されていなかった。大善寺の伝毘沙門天立像は鎌倉時代初頭に中尊寺金色堂様式を受け継いだ作例として明白であり、鎌倉幕府における文化形成や日本彫刻史の展開を探るうえで、現在唯一の遺例である。三浦一族の仏教信仰やこの地方の歴史や文化的伝統と重みを考えるうえで貴重な存在である。

毘沙門天立像

⑧円通寺跡・深谷やぐら群

円通寺は三浦氏為通開基と伝わる。本尊は現在は清雲寺本尊である滝見観音であった。深谷やぐら群は円通寺跡の背後斜面に展開し、江戸時代の地誌の絵図には１９穴が描かれている。最上部の1号やぐら手前には文永八年銘板碑、1号やぐら内部には初代為通、三代義継のものと伝わる五輪塔があったが、昭和１４年の海軍による一帯土地の買収に伴い、いずれも現在は清雲寺境内に移されている。

円通寺跡・深谷やぐら群　遠景

円通寺跡

深谷やぐら群　中段部西面

深谷やぐら群　1号穴